

南半球便り（その 75）：躍動するガリバー達

5 月 10 日

ついに、念願が叶いました。名にし負うオーストラリアン・フットボール（AFL）の試合をスタジアムで観戦することができたのです。その報告をさせてください。



観戦したキャンベラ市内の競技場「マヌカ・オーバル（卵形グラウンド）」

1. 外務貿易省（DFAT）の粋な計らい

豪州人の友人に会うたびに聞かれてきたのが、「シンゴ、AFLの試合は見ただろうな？」という質問でした。

米国で言えばMLB（野球）やNFL（アメリカン・フットボール）、英国で言えばプレミア・リーグ（サッカー）に当たると言っても過言ではないでしょう。まさに豪州らしいスポーツの代表格。熱狂的なファンが多いスポーツでもあります。

嬉しいことに、キャンベラで行われた、シドニーのジャイアンツ vs ジローン（ビクトリア州の都市）のキャッツの試合に招待されたのです。呼んでくれたのは、豪州外務貿易省の太平洋担当部局。何とも粋な計らいでした。

私のサイクリング仲間のフィジー大使、さらにはパプア・ニューギニアの大使や英国大

使館員らと、期待に胸を膨らませてキャンベラ市内マヌカにある「オーバル」（卵形グラウンド）に赴きました。

2. AFLとは？

オーストラリアン・フットボールと言われても、ピンとこない日本の方が多いでしょうね。袖無しユニフォームを着た屈強な男達が走り回るサッカーとラグビーの中間のようなスポーツと言うと、「ああ、あれか。」という人もいるかもしれません。

私にとって初めての観戦でしたが、ルールは極めて簡単。キックかハンドボール（片手で持ったボールを、もう一方の手で押し出す形）でボールを繋ぎ、ゴールの高いポストの間を目指してボールを蹴り込む競技です。1ゴール6点で、得点の多さを競います。



グラウンドは卵形（オーバル）で、ほかの多くのスポーツよりも大きい。



4本あるゴールポストのうち、内側の高いポストの間に蹴り込むと6点獲得。

1チーム22名のうち、グラウンドに出てプレーするのは18名。総勢36名の選手が卵形のグラウンドに出てボールを奪い合うことになります。圧巻はキックされたボールをジャンプして奪い合う姿。飛び上がって相手チームの選手の肩に両膝を乗せ、ボールを奪うようなアクロバティックなプレーも見られます。



キックされたボールを、相手の肩に飛び乗ってキャッチすること。



タックルは肩から下、膝より上の範囲で認められている。

（日本オーストラリアンフットボール協会HPに掲載の[紹介動画](#)から。）

3. 迫力満点

攻守の切り替えがめまぐるしく、得点が次々に入るので、なかなかゴールが決まらないサッカーの試合で感じるようなストレスはありません。また、舞い上がったボールを取り合う際の競り合い、そして膝上から肩まで認められている相手選手へのタックルなど、激しい接触プレーも魅力満載でした。



観戦したジャイアンツ対キャッツ戦の様相（5月8日）

（ジャイアンツのメイン・スポンサーはTOYO TIRES。）

それにつけても、少し離れたスタンドから見ていても、選手の体格の図抜けた大きさが目立ちました。優に185センチどころか、2メートルに届こうというような選手が、所狭しと走り回ります。一試合で20キロ走ることも珍しくないそうです。

選手にとっては、体が大きく接触に耐えるだけの頑強さが必要である上、機敏に走り回る敏捷性と長時間走り続ける持久力がないと務まりません。特に、ゴールを目指すだけでなく味方の間でボールを繋ぐためにもキックの正確性は重要で、左右両足で決められなければなりません。また、アメフトと違って防具もないので、膝や肩の怪我はつきもののようです。

まさに、ここまでタフなスポーツは、まずないでしょう。観戦を堪能しながら、「ガリバーの競演（笑）！」と唸っていました。さらに言えば、豪州には女子リーグもあるのです。

4. 地方色

面白いのは、豪州の中でもAFLが最も盛んなのはビクトリア州であること。英国植民地時代の1850年代にリーグが結成され、その後、南豪州、西豪州、タスマニアなどの豪州南部地域で定着した由。

今はニューサウスウェールズ州やクイーンズランド州からも 2 チームずつ A F L に参加しています。でも、これらの州では、どちらかというとラグビーの方が主であるそうです。何と言っても A F L の主流は、10 チームを出しているビクトリア州。このあたりの豪州各地方ならではの特色は、住んでみて初めて分かる話でもあります。

ビクトリア州の州都メルボルンにある A F L の聖地が、メルボルン・クリケット・グラウンド (M C G)。収容人員は何と 10 万人！地鳴りのような大歓声に包まれながらガリバー達がボールを奪いあって跳躍し、キックを競い合う姿が目に見えます。



リーグ優勝決定戦開催日の M C G (出典：日本オーストラリアンフットボール協会 H P)

5. スポーツ大国

日本から見ると、豪州は水泳大国、ラグビー強国とのイメージが強い国ですね。もちろん、東京五輪の水泳でもそうでしたが、素晴らしい成績も残しています。水泳については、「小さい頃から学校で学ぶので、豪州人に『金槌』はいない。」との話も聞きました。

同時に、何人もの豪州人から、「夏のスポーツの華はクリケット。冬のスポーツの華は A F L。」と聞かされました。実際に、体格に恵まれ、運動能力の高い子供達は、こぞって AFL に惹かれるとのことでした。日本で言えば、イチロー、大谷翔平など、記録と記憶に残る選手を輩出し続ける野球に当たるのでしょうか。

それにしても、間近に見た A F L の迫力の凄いこと！これを見た誰しものが、「オーストラリア、恐るべし。」と感じ入ること請け合いです。

そこで、素晴らしいホストとして懇切丁寧に説明をしてくれた豪州外務貿易省関係者に対し、「威圧や強迫に訴えてくる国の代表団を A F L の試合に連れてくれば、考え直すのでは？」と提案しておきました。爆笑しながらも頷いていたその姿に、オーギーの静かなプライドと、この国の逞しさが漲っていました。